

男役のアイデアを求めて

鈴木国男

2020年4月から2021年3月までの1年間、サバティカル（研究休暇）を取得した。『KYORITSU REVIEW』は大学院の研究誌であるから、最もふさわしい媒体であると考え、ここにその報告を記す。

このたびの研究は、「共立女子大学及び共立女子短期大学教員研修規程」に基づくものである。これは昭和58年4月1日より施行され、その後一度たりとも改訂されたことはなく、またそれ以来この規程による研修がどれだけ行われたか詳らかではない。ただ、筆者の記憶に残るのは、1997年に当時文芸教養コース所属の教員であった山下敦先生が1年間ウィーンで研修をされたケースである。また、それより10年ほど前（筆者の文芸学部着任以前）に、同様にして仏文コースの鹿島茂先生がパリに行かれたことがあると聞き及んだ。これについては鹿島先生から直接うかがったこともあるので、後ほど記す。その後、2012年4月発行の『地中海学会月報』に寄稿した文章に、今回の研修に至る経緯の発端を記したので、その一部を引用する。

話は1997年に遡る。この年、同僚の一人がウィーンで一年間の研修を行った。別に珍しい話ではない。筆者の勤務先の共立女子大学には、サバティカルという制度がないので、私学振興財団の研修制度を利用したものだった。これは、費用の半分を所属する大学が負担するのだそうで、学部の前例としては、その10年前に鹿島茂先生がフランスに行かれたのが最後ということだった。それで10年後、すなわち2007年には私をヴェネツィアに行かせて下さい、と逸早く手を挙げたのだった。留守中の雑用や学生指導、代わりの非常勤の手当てなど、少なからず迷惑をかけることになるので、10年間は粉骨砕身働いたつもりだった。ひたすらヴェネツィアでの生活を夢見て……

2007年は、周知の通りカルロ・ゴルドーニの生誕300年にあたる。だが、

それ以前に大学の方針で海外研修の途は閉ざされてしまったのである。(引用終わり)

結局、この2007年に東京のイタリア文化会館でゴールドーニに関するシンポジウムを開催することができ、その際に招聘したヴェネツィアの著名な教授の好意から今度は翌年に開催されたエレオノーラ・ドゥーゼに関する国際シンポジウムに招かれ研究発表する機会を得た。この短い記事は、二つのシンポジウムに関する報告とその経緯を短くまとめたもので、サバティカルのくだりは、いわばマクラに過ぎない。ただ、厳密に言えば訂正すべき個所もあった。まず、「私学振興財団」とは、正しくは「日本私立学校振興・共済事業団」のことである。また、「共立女子大学にはサバティカルという制度はない」というのも、筆者の思い違いであった。

あえて弁明するならば、山下先生のおそらくは鹿島先生も)利用された事業団の研修制度(すなわち費用を事業団と学園で折半する)の利用は、本学園においてはその後間もなく廃止され、教授会でもその旨報告された。その際、当時の国際文化学部では、学部予算から独自の基金を積み立て、それをもって教員の研修費用に充てることが検討されているとのこと(この制度については後述する)であったが、文芸学部においてはそのような動きはなく、筆者は事実上海外研修の途は閉ざされたと考えたのである。

しかし、間違いは間違いである。この短い文章は、当該学会員ではない当時の学部長から前学長の許に届けられたらしい。早速学長室に呼び出され叱責された。筆者が理解した前学長の見解は、「研究のために休みたければ休職すればよい。その場合、本給は支給される。これが本学のサバティカル制度である。」というものだった。筆者はそこまで調べて、あるいは問い合わせたあの記事を書いたわけではなかった(何しろマクラに過ぎないので)が、確かに間違いと言われればその通りである。被害妄想かもしれないが、学内で発言すると何かにかこつけて大学を批判していると誤解されることがあるのは不徳の致す所だとして、この記事差し替えるよう求められたのには困った。すでに印刷され

て会員に配られているものは如何ともしがたいが、学会のホームページでは当該箇所を削除することになり、穴があったら入りたい心地で事務局長に相談したら、かえって同情された。

しかし、ものは考えようで、間違いを正されたおかげで次の目標ができた。現行の「サバティカル制度」を利用するのだ。それには貯金だ。本学では、他大学での非常勤講師としての授業は週4コマまでと定められている。幸い、ほとんど毎年それだけの依頼があるので、届け出た上で行なって来た。それによって得られる収入がどの程度のものかは容易に推測できるだろう。筆者の場合、学外からの報酬と教員研究費のほとんどは以前から目に見える形で学生に還元するようにしている（例えば、宝塚歌劇のDVD・BDは1本1万円前後する）が、その中から少しずつ積み立てて、支給されない1年分の賞与・手当および研修に必要な費用に相当する程度に貯まったら、研修を申請しようと決めたのである。

この見通しがかなり甘かったことも後半できちんと報告するが、光陰矢の如し、定年を考えればもうあまり猶予はないことを自覚せざるを得なくなってきた。そこで2019年度の半ばで、思い切って当時の山本学部長に相談した。山本先生は大変親身に応援して下さり、各方面に問い合わせたり、制度・規程というものに全く疎い（だから前述のような失敗をした）筆者に代わって、規程や前例についても調べたりして下さった。そして、それを引き継いだ深津学部長も丁寧に手続きを進めて下さったのである。

この過程で、国際学部の先生2名の海外研修に関わる資料を目にすることができた。ここで詳細を述べるのは差し控えるべきだろうが、予算は大体予想通りのもので、それが前述した国際学部の基金（名称や詳細は詳らかではないが）から支出されていることも推測された。それらを参考にした上で、「2020年度 共立女子大学・短期大学教員研修申請書」を、2019年10月1日付で学長に提出した。2020年4月1日から2021年3月31日まで1年間の国内研修で、研修課題は「イタリアオペラと宝塚歌劇」、研修機関は早稲田大学オペラ/音楽劇研究所とした。

本稿の題名にも入っている「男役のアイデア」という標題では、すでに3本の論文を文芸学部紀要に発表しているので、その研究をさらに進めるというのが主たる目的なのだが、「イタリアオペラと宝塚歌劇」の研究も従来から継続しており、何よりも、通常の勤務では不可能である長期間のイタリア滞在も是非実現したいと考えており、同時に過去の研究を今一度整理して、足らざる点や見逃していたヒントを洗い出すことがまず必要だと痛感していたので、これを課題として申請したのである。

1997年の時点で考えていたのは、もちろんヴェネツィアにおける1年間の研修である。それ以降になったとしても、先に言及したシンポジウムなどによって現地の研究者との交流は一層緊密になっていたから、受け入れ態勢の点からは十分に可能なはずであった。ゴルドーニイヤーは終わっていたにしても、本場に滞在していれば学術的な催しはいくらでもある。外国演劇を研究する者にとって、1シーズンに上演される舞台のほとんどを見尽くすことがいかに大切であるかは言うまでもないことなので、それに対する期待もあった。にもかかわらず海外研修を選択できなかったのは、ひとつには年齢的な問題もある。海外は言うに及ばず、日本の他大学に勤務する知人・友人の例を見ると、定年までに2度あるいは3度サバティカルを取得する例も珍しくはない。そもそもサバティカルは旧約聖書の安息日（神が6日間で世界を作り7日めに休息した）に由来し、従って今では日本でも当たり前に使われているユダヤ教・キリスト教式の暦では1週間は7日で日曜日（あるいは土曜日）は休日である。7年とは言わずとも10年に1度チャンスがあれば、定年までに2・3回のサバティカルを取得しても不思議ではない。つまりもう「最後の」サバティカルを取る年になって「最初の」経験をすることになり、半年以上の外国生活は留学以来ほぼ40年ぶり、イタリアならば生活に不安はないが、むしろ日本における家庭環境や体力を考えると、かつてのように身軽に飛び出しては行けない。

しかし、最大の問題はやはり経費である。参考にさせて頂いた国際学部の先生の例を見ると、お一人は6か月、もうお一人はほぼ1年の海外研修で、それぞれの予算は、筆者がこの1年間に支給されなかった賞与・手当の総額にほぼ

相当する金額であると思われる。だから、本給が支給され、別途これだけの金額が何らかの形で与えられるならば、たしかに長期海外研修も可能だということになる。その費用の捻出には国際学部独自の工夫・努力の跡が窺われるが、具体的な方法は承知していない。これに「自助努力!」を加えれば、それなりに充実した研究ができるかもしれないが、一方で、例えば留守宅や家族の状況などの個人的事情も大きく関わってくるだろう。鹿島先生の場合、まだ小さかったお子さんを含む御家族でパリに滞在されたが、この年の世帯収入は貧困家庭のそれに認定され、翌年帰国すると市役所から粉ミルクの配給があったと笑いながら語られたのを聞いた記憶がある。

そうした諸々の事情を勘案した上で、国内研修を選択した。長期の国外滞在というのは、もちろんその間の私的な旅行であり、どこにどのくらい行くのかは決めていなかった。研修先として早稲田大学を記入したのは、随分以前からこの研究所の招聘研究員になっており、名目的な研修先とするには落ち着きが良いと思われたからである。「名目的」という表現は確かに無責任で安易な面もあり、その点ではすぐに反省を迫られることになるのだが、自分としてこの時点では自然な選択だった。これはいわゆるヴァーチャルな研究所で、事務局の一部門が運営上のサポートを行ない、研究員にはIDカードが与えられ、それによる図書館の利用が可能だが、それ以外に特定の施設が設けられているわけではない。早稲田の教員が主宰者となって参加者を募り一定の手続きを踏んで開設され、同様の研究所が多数あると聞いていた。筆者の場合も、その前身となる研究会に参加し発表したこともあり、自然に招聘研究員になって何年も経過していた。

申請がほぼ認められた段階になって、受入れを証明する書類の提出が求められた。研修の実現が見えてきたのは実に喜ばしいと同時に不安でもあった。考えてみれば、山下先生・鹿島先生のケースも、国際学部の先生方の場合も、前述の「規程」に基づく研修に変わりはないが、その実態は「規程」の外にある諸事情の変化によって異なるものとなっており、筆者の場合はそのいずれとも違う「前例のない」ものだった。また、現学長がそれに対してどのようなお考

えをお持ちかも定かではなかった。「規程」の第4条第2項によれば、国外研修の場合は、受入れ先の承認書と訳文を提出することになっているが、国内研修に関してそのような条文はない。だからその時点で、書類を提出しないで済むように交渉するか、あるいは共立女子大学を研修先とする可能性（このことについては後述する）を確かめれば良かったのだが、小心ゆえにそれをせず、早稲田大学から承認書に相当するものを発行してもらおうと考えた。

だが、その研究所は年度ごとの更新制になっており、新年度になった時点で研究所が存続し、研究員が継続の意思表示をすると委嘱状やIDカードが送られてくるしくみだった。したがって、その時点で所持していた委嘱状は2020年3月までのものだったが、過去のものは何枚もあり、そうした前例に則って来年度も継続するものとして認めて貰いたいと言ったのだが拒絶された。しかたがないので、主宰者の先生と事務局に事情を説明して、早稲田大学総合研究機構長から共立女子大学長に宛てた「オペラ / 音楽劇研究所招聘研究員の委嘱予定について」という書類を発行してもらった。先方にとっても「前例のない」ものだったようだが親切に対応してくれた。それでも無駄な時間と労力が（先方にとっても自分にとっても）費やされたという無念の思いと、これで何とかしてほしいという小心な事なかれ主義の本音が交差した。

これが、本質的ならざる些細な問題かという、そうではないということをは是非述べたいと思う。まず、今まで厳密な定義をしないままに使ってきた「サバティカル」という言葉である。大学教員が7年（あるいは一定の期間）ごとに研究に専念すること、というのが一般的な意味であり、筆者が外国研究に携わり、外国の研究者と接する機会が多かったため、周囲にそのような話題は普通にあった。また、今までに常勤・非常勤を合わせて10以上の大学で授業を担当してきたが、そのほとんどで「サバティカル」を取得する教員を見てきた。知る限りのすべてが在外研究であり、費用に関しては何らかの形で大学からの支出があり、毎年一定数の枠があるとか、順番が回ってきたので取るようになったとか、日本関係の研究者なのに海外に行くとか、決められたことだからとさして嬉しそうな様子もなく出かけるとか、内心羨ましく思うケースもあった。

本学に所属する以上本学の制度に従うのは当然なので、あえて他大学の制度を調べようという気にもならなかったが、前述の「規程」には、「研修」と書かれていても「サバティカル」の文言はない。それでも「サバティカル」の語を使うのは、「本学にサバティカルがない」という筆者の認識は誤りであり、休職することによってそれが実現可能であるという前学長の明言があるからだ。そして、相応の費用を使って外国に長期滞在して研究するのは、そうすることによって初めて達せられる目的があるからに他ならない。その場合には、研究の場を保証する受け入れ機関が必要だということも理解できる。筆者の場合、親しい教員の多いヴェネツィア大学かパドヴァ大学ならば受け入れて貰えるという見通しはあったし、そのための施設が整っていることも承知していた。現に前任校に在職中2か月ほどであったが、パドヴァ大学でそのような機会を持ったことがあり、大学のゲストハウスに滞在し、キャンパス内に独立した研究室を与えられた。そのような環境にあれば、様々な資料の現物（電子情報ならいながらにして得られる時代ではあるが）に思いのままアクセスすることもできるし、授業の聴講や学会・研究会への参加、個人的な交流、そして毎日のように劇場やミュージアムに通い、200年以上前の面影を色濃く残す街の中に身をおいて思索することも可能となるはずである。

翻って国内研修の場合はどうだろうか。もちろん研究内容によっては、国内で上記のような条件を求めることも考えられる。筆者の場合、兵庫県にある劇場や図書館を訪ねる必要はあるが、それは何も休職しなくても日常的に行なっている。早稲田大学の研究所では、定期的に研究会・懇親会が開かれるが、それもまた日常の営みである。したがって、そこを研修先として申請したのは、本務校以外にそうした機関を設定するのが一般的であるという、筆者の思いこみに過ぎなかった。なぜ本務校を研修先としなかったのだろう。そんなコロナブスの卵のようなことに思い至らなかったのは不覚であった。

少なくとも筆者の場合、早稲田の研究所での活動は従前通り続けていたにしても、研修のテーマに関しては、これまでと同じように本学における研究で全く支障はなかったのである。それどころか、近年、文芸学部の専任教員全員に

個人研究室が与えられ、週4日の出校が義務付けられている。仮に週6コマの授業を3～4日に分散すれば、一日当たり1～2コマである。学生指導や諸々の業務をこなしたとしても、研究に充てる時間は十分にある。通勤定期代も支給され、出退勤時間も定められているわけではないから、週5日でも6日も研究室を使うことができる。筆者の場合、コロナ禍の前から1時間目の授業がある日は混雑を避けるため7時半には出勤していたので、そこから仮に20時半までとすれば、週78時間を研究室で過ごすこともできる。授業も学務もなく、そのほとんどを費やすことができれば研究も大いに捗るに違いない。本学が東京の中心に立地し、世界一の古書店街に隣接し、多くの大学・図書館・劇場・ミュージアム等に対しても至便であることがオフィシャルガイドなどで常に謳われていることは言うまでもない。

サバティカルという概念がユダヤ教・キリスト教由来であるため、欧米に関係した研究に携わる者には当然のように受け止められ、それ以外の分野ではあまり馴染みがないという時期も長かったかもしれない。また、理系と文系では研究の在り方も人材交流の実態も大きく異なるだろう。しかし、現在では日本でもミッション系の大学から主要大学にかけて、こうした制度を取り入れている所も少なからずあり、学会などでそれを利用した研究や経験に接することによって、多くの研究者がその概念を共有し、かつ肯定的に捉えていることは間違いないと思われる。本学においても国際学部・文芸学部の多くの教員はすでにそうした認識に立っているだろうし、研究のため海外に赴く必要のない同僚にも平等に研修の機会が与えられることによって、予想以上に研究の成果が上がり、それが学生に還元されることを望まない者はないだろう。その実績が文芸学部でわずか2件、国際学部でもおそらく数件に留まっていたという事実を、我々はどう受け止めるべきなのだろうか。むしろ、文芸学部が率先して、比較的实现しやすいと思われる「共立女子大学における国内研修」という形で実績を積み重ねるという方策を考えてみてはどうだろうか。その際には、やはり経費に関する議論も必要になってくる。そう思い至ると、自分のことばかり考えていたことが恥ずかしくなる。

ともあれ1年間の研修を終え、「規程」に基づき、2021年6月28日付で学長に「長期国内研修に関する報告書」を提出した。ただし規程の第12条第2項の文言は、「報告書は論文体とし、B5判400字詰原稿用紙を使用し、長期研修は20枚以上50枚以下、短期研修は10枚以上20枚以下とする。」という現状にそぐわないものなので、学長の判断により、ワープロA4判横書き2枚の報告書と図書館に寄贈した著書（後述）をもってそれに代えた。報告書には本稿においてこれまで述べてきた趣旨の要約も示し、1年間の研究経費も報告したので、ここにも同じものを記す。

資料費	434,854 円
交通費	61,880 円
出張旅費	410,000 円
観劇費	330,400 円
計	1,237,134 円

すべてこの1年間に支出されたもののみで、当然のことながら領収書は保管してある。出張旅費は、観劇・調査のため主に関西に行った時の交通費・宿泊費で、一定の基準により控えめに算出しているので、領収書の合計はこれを上回る。交通費は、研究・学生指導・研究室業務のため大学に来た場合の往復交通費である。それ以外の場所・目的によるものは一切含まれていない。休職中は定期代も支給されないの、どこへ行くにもその都度電車賃を支払わなければならない、集計はしていないが、実際にはこれが最も痛かった。せめて定期代の支給を受けた「本学における研修」を提唱する所以である。

資料費については、これまで集計したことがないが、感覚としては例年と変わらない。新聞を除く定期刊行物と随時購入した書籍・雑誌の代金で、研究には今までに蒐集した資料を多く用いているが、もちろんここには含まれない。経常支出としての学会費なども加えなかった。出張旅費と観劇費は、例年の半分以下である。ここにこそ、今回の研修における予期せぬ事態の影響があった。

言うまでもなくコロナ禍である。

もし、パンデミックが起こらず、思い描いていた通りの1年間を送っていたとしたら、計2～3か月の海外滞在があっただろう。やるべきことの内容やその時期によっては、2度3度往復することになったかもしれない。活動の幅が広がれば、移動の距離も購入する資料の量も増えるだろう。国内出張と観劇の回数も2倍以上になっていたと思われる。(観劇についてはすべて記録してあるので数の増減は明確に把握できている。観劇にあてる時間の余裕は格段に増すので、当然回数も例年を上回ったはずだ。)これらの事がすべて期待通りに実現し、それにかかる経費を支出していたなら、前述の国際学部が先生が1年間の海外研修のために受け取った総額をかなり上回ることになる。そのくらいの準備をして臨み、コロナ禍によってそれよりも支出が少なかったのだから経済的には余裕があったと言いたい所だが、実際にはかなり苦しかった。それは十分な準備が整わないままに時間切れ見切り発車してしまったことと、支給されなかった賞与の一定の部分と交通費は、恒常的に生活費に組み込まれていた(本給だけで日常生活と保険を含めた将来への備えを賄っていたわけではなかった)ことが原因である。それは個人の生活設計の問題なのか、身の程知らずに過剰な学生還元を試みて来た結果なのか、あえて自問する気にはならない。

さらに付言するならば、鹿島先生、山下先生は、その後移った大学で二度目のサバティカルを取得されたし、他にもかつて文芸学部の教員だった人が転出先でサバティカルを取った例もあり、これからもあるだろう。筆者のような年齢になり扶養家族がなくても、現行制度によるサバティカルは経済的に苦しい。一番良い方法は他大学に転出することですよ、などと報告しなければならないとしたら、あまりにも心苦しい。

さて、肝心の研究内容に至る前に紙幅のほとんどを費やしてしまった。とはいえ、実の所それほど報告する内容を持ち合わせているわけではない。前述のように、まずはこれまでに行なってきた研究の整理・再検討から始めた。ちょうど以前からあった出版計画を実現する機会でもあったので、既発表の論文か

ら12本を選び、加筆・修正・再構成の上、『イタリア・宝塚・2.5次元』（春風社 2021年3月）を上梓した。研修報告の一部として大学図書館に寄贈したので、一瞥の上御批判頂ければ幸いである。

また、研修期間は事実上のロックダウンと共に始まったようなものだったので、しばらくは晴読雨読の毎日だった。そのおかげで、長年積み重ねられた、むしろ専門外の未読書の山を少しずつ崩すことができた。これが有形無形予想外の恩恵をもたらしてくれた。これだけでも七分の一の安息日の真実を悟った思いだった。一方、イタリア行きの方は諦めざるを得なくなったのは言うまでもない。昨年前半、イタリアは世界でも最もコロナの被害が大きかった地域なので、ただ心を痛め友人知人の安否を心配することしかできなかった。しかし、ワクチン接種が始まると、イタリアは目覚ましい成果を上げ、それに引きかえて我が国の状況をもどかしく感じるようになった。自由な往来が可能になる日が待ち望まれるが、まだ先のことになりそうである。

主たる研究テーマである「男役」については、『歌劇』誌などに記された文言からその形成過程を読み解く作業が続けている。順次紀要に発表しつつ、最終的にはまとまった著作とする予定で、詳しい内容はそちらに譲る。ただ、研修の過程において、テーマに関わる大きな出来事が一つ、ささやかな発見が一つあったので、それをここに記すことにする。

その一つは、宝塚歌劇団専科で特別顧問の轟悠が2021年10月1日付で退団したことである。その発表が行われたのが、ちょうどサバティカル期間が終わろうとする3月のことだった。宝塚には現在、花・月・雪・星・宙の5組があるが、芸芸に優れた生徒を選抜し随時各組に出演させる専科制度も古くから設けられている。その中で、別格と見られてきた存在が4人いる。初期の少女歌劇時代から六代目尾上菊五郎にも認められた舞踊の名手として知られ、劇団理事として在団のまま没した天津乙女。戦前戦後の長きにわたり数々の主演舞台を勤め、男役の、そして宝塚の象徴のような存在として永らく専科に在籍し、名誉理事として2012年に97歳で世を去った春日野八千代。そして近年、それぞれの後継者のような扱いで公演や式典における日本舞踊の要となり、あるい

は堂々とした主演舞台を重ねてきたのが、松本悠里と轟悠であった。その二人が、2021年に相次いで劇団を去ったのである。その背景や事情については明らかではなく、また詮索することも無意味であろう。しかし、筆者の研究テーマである宝塚歌劇における伝承を考える上では重要な出来事と受け取らざるを得ない。

能・歌舞伎のような「伝統芸能」とは異なり、宝塚歌劇には「型」に相当するものが存在しない。にもかかわらず独自の様式が作られ伝えられているのは、100年以上にわたり相応の大きさを持った劇団として存続し、絶えることなく公演を続け、かつ人材の新陳代謝が連続的に行なわれる中で、見て聞いて試して省みてという経験の積み重ね、すなわち「学び」という行為の原点である「まねび」が営々として続けられて来たことの結果である、というのが仮説であり、語られ記された言葉によってそれを裏付けるというのが研究のテーマなのである。そのように考えると、天津・春日野・松本・轟の存在は、そうした伝承を直接に保証するものであったと思われる。それが断絶することの意味を、改めて検討しなければならない。かつて星組のトップスターを務めた紫苑ゆうが宝塚音楽学校で教えているという事実はあるが、退団以来久しく歌劇の舞台には立っておらず、轟の役割と同列には論じられない。とりあえず、創設以来107年の歴史的・理論的な研究はこれまで通りの方法で続けることに変わりはないが、この先、その「アイデア」の在り方が変容するののかも、もう一つの課題になるかもしれない。

もう一つは、文字通りの乱読から偶然に出会ったヒントである。それは、脳の「海馬」と呼ばれる部位に関する事柄である。池谷裕二・糸井重里著『海馬―脳は疲れない―』（新潮文庫 2005年）によれば、記憶を司る海馬は、30歳を過ぎるあたりから急速に発達し、それによって、つながりを発見する能力が飛躍的に伸びるということである。そしてそこからはワインが熟成するようにすでに構築したネットワークをどんどん密にしていく時期に入る。これはまさに「男役10年」に符合する。宝塚音楽学校に入学するのは15歳～18歳、2年の修学を経て歌劇団に入団し（研究科1年、いわゆる研1に入ると考える）、

研7までは組公演に参加しながら新人公演でより大きな役の試演にも挑戦し、スター候補となると次のステップとして小劇場での主演、大劇場公演での主要な役を経て、研12～15あたりがトップ就任の適齢期とされる。これが年齢にすればほぼ30代前半に相当するのだ。そしてトップ在任はおよそ3～5年である。女性として生きて来た少女が音楽学校で「男役」というネットワークを構築し始めてちょうど10年あたりで新人公演を卒業すると、目を見張るような成長を見せる。もちろん早熟な才能もあるが、それがさらに熟成して本物になったと感じさせるのは、まさに30歳を過ぎたあたりというのは、数多ある事例が物語っている。これからの研究においては、それを裏付ける言葉にもアンテナを張っていくことにしよう。